

対話が生まれる場作りを目指す

北陸大学 F L C ファカルティカフェで悩み相談など

金沢市に位置する北陸大学(東風安生学長)は、高等教育の在り方をあらためて問い直すことをめざした改革を進めている。同大学高等教育推進センター長の杉森公一教授が推進するのは、単なる教育手法の伝達ではない。教員同士が学問分野を超えて語り合い、教育実践を省察する仕組み「ファカルティ・ラーニング・コミュニティ(F L C)」である。この取り組みについて、杉森教授に聞いた。

杉森教授に聞く

○研究者から教育開発者へ
杉森教授はもとも化学の研究者である。転機は、私立大学職員時代に訪れた第2期認証評価だった。関連調査を進める中で、アクティブラーニングやI Rの重要性に気づいたという。

その後、金沢大学で文部科学省事業「大学教育再生加速プログラム」に携わり、全学にアクティブラーニング型授業を広める役割を担った。しかし、国立大学で全学的改革を推進するのは容易ではなかった。教員の説得にも苦勞し、そこで痛感

半数が参加するという。F L Cは、8人程度のメンバーが特定テーマで定期的・継続的に集まり、学び合うコミュニティである。米国では様々な体系化されており、実に40年以上の歴史を持つ。研修プログラムを通じて10年で大学構成員の半数が参加するという。

「この理論は、教員の省察を同僚性の場で支えることで、新しい思考と行動を創発するアプローチであるという。」
○センター立ち上げとファカルティ・カフェ
2020年、杉森教授は高等教育推進センターに着任し、専任1人でセンターを立ち上げた。ここでの実践は、先述の理論を親しみやすい形で具現化している。その象徴がファカルティ・カフェである。

個々の熱意や一時的な号令に依存するのではなく、組織の仕組み・システムとして継続的に機能する教育改善モデルと言える。杉森教授はカルチャーショックを受けた。F L Cの基盤に据える理論的背景は、哲学的かつ科学的である。「対話(ダイアローグ)とは『意味の流れ』であり、自分の思い込みを一度保留し、結論を急がず、その場で耐え抜くプロセスです。これにより、全く新しい思考や行動が生まれる創造的な場が形成されるのです。この保留を助けるのが、対話を通じた意味の再構成です。これを私は『対話型省察の実践』と呼んでいます。」

これは、会議や研修会のような堅苦しい場ではない。教職員が和やかな雰囲気の中で授業や学習支援について自由に語り合える「場」である。お菓子やコーヒーが用意され、それぞれが呼んでほしい名前を呼び合い、お互いの話をよく聴き合うことを大切にしながら、心理的安全性を担保する仕掛けが施されている。

「最初に『この1週間で良かったこと』を共有するスモールトークから入り、その後授業のつくり方や学生の学習をどのように支援するかといった本題に入ります。ここでは解決を求めません。ただ共有して聴き合う。すると、教授会では口に出さない本音や悩みが溢れ出してくるのです。」

2024年度にカフェは6回開催されて延べ87人が参加。さらに、授業コンサルテーションは年間209件、約131時間間に達した。このようにカフェは、同センターが提供する様々なプログラムへの呼び水としても機能している。



杉森教授

「O C T Lの役割と米国同センターの運営は、米国P O Dネットワークが提唱するC T L(Center for Teaching and Learning)に基づいている。C T Lは以下の4つの象限で整理される。」

- ①ハブ／触媒：分野を横断して人々を結びつけ、文化変革を促す、②インキュベーター：変革を長期的に支援する、③寺院：信頼と希望の拠点となり、教員の拠り所となる、④選別・研究・実践をエビデンスに基づいて評価し、優れたものを抽出する

「私の目標はセンターが必要なくなることで、組織の壁が消え、至る所で自然に対話が生まれ、教育改善が自律的に回る。そうならば、私の役割は終わりです。」
効果率を求める現代社会において、あえて時間のかかる対話を大切にすることは勇気が必要である。C T Lは、民主的な合議を支えるインフラであり、ハブであり、サードプレイスである。その文化を育てるために、杉森教授は現場から粘り強く挑戦

「授業における生成A I利用の現状と課題」をテーマにしたセミナーを開催しました。学生がどう生成A Iを使い、教員がどう向き合うべきか。これも、一方的な研修ではなく、参加者が直面する課題を共有し、解決の手がかりを探る対話の場を目指しました。」
I Rによるエビデンスと、F L Cによる内面的な対話。この両輪が揃って初めて、大学は学習者中心の組織へと進化するという。

「私の目標はセンターが必要なくなることで、組織の壁が消え、至る所で自然に対話が生まれ、教育改善が自律的に回る。そうならば、私の役割は終わりです。」
効果率を求める現代社会において、あえて時間のかかる対話を大切にすることは勇気が必要である。C T Lは、民主的な合議を支えるインフラであり、ハブであり、サードプレイスである。その文化を育てるために、杉森教授は現場から粘り強く挑戦

を続けているのである。